

## An Oriental experience of Ernst Mach

Michihiko Harasaki

*Laboratory of Philosophy, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan*

According to Mach, our world consists of various fundamental elements and their twinning. Its anti-substantialism has, as often said, an oriental atmosphere. But Mach did not only conceptually imagine such a world, but would also really experience it. For that Mach tried to dive deeply into the sensuous, towards the fundamental elements at the bottom of the sensuous. And this is what brought about an oriental experience for Mach, that is, Mach experienced the disappearance of separation between himself and the world. Of course, Mach did not intend this to happen. But to dive deeply into the sensuous is the basic technique used in oriental meditation and this oriental meditation is what Mach experienced.

エ  
ル  
ン  
ス  
ト  
・  
マ  
ッ  
ハ  
に  
お  
け  
る  
東  
洋  
体  
験

原崎 道彦 (高知大学教育学部・哲学研究室)

\*以下は日本倫理学会第六〇回大会(二〇〇九年一〇月一六日～一〇月一八日)において原崎がおこなった自由課題発表「エルンスト・マッハにおける東洋体験」の内容である。最後に発表後におこなわれた質疑応答の要旨を添えた。

エルンスト・マッハと言えば、「飛行機がマッハにながして飛ぶ」と語られるときの、速度の単位である「マッハ」の「マッハ」であるわけですが、そのことがしめしているように、エルンスト・マッハはもともと自然科学者であったわけですし、いわゆるマッハ哲学なるものは、そうした自然科学者としての立場から考察された、自然科学の基礎理論とでも言うべき性格をもつものとなっています。そうしたことがあるためマッハは、科学哲学の場で扱われることがしばしばあるとしても、たとえば本日のような倫理学会の発表の場で扱われることがほとんどない存在となっています。ここにもマッハを何か場違いなものに感じられている方がいらっしゃるかもしれません。

が、それにもかかわらず、私があえてここでマッハに関する発表をおこなうこととしたのは、自然科学の基礎理論とでも言うべき性格をもつ、そのマッハ哲学が、東洋思想と深いかわりをもつというだけでなく、そうした(東洋思想と深いかわりをもつ)マッハ哲学がマッハ本人に東洋的な体験をもたらしてもいいたのではないかと、ということに気づいたからです。

しかし、自然科学の基礎理論とでも言うべき性格をもつ、そのマッハ哲学が東洋思想と深いかわりをもつというだけでなく、かなり意外に感じられる方が多くいらっしゃるかもしれません。もちろん、マッハが東洋思想系の本をしきりに読みふけたことがあったとか、そうした書物から刺激を受けたことがあったとか、あるいはさらに、気功とかヨーガに凝ったことがあった、というような伝記的な事実は(誤解のないように申し上げます)まったく存在いたしません。私がお話したい、マッハ哲学と東洋思想のかわりとは、マッハ哲学そのものにあまりにも東洋的なところがあるということなのです。

ご存知のように、マッハ的な世界とは、さまざまの多元的な「要素」とそれら

のあいだのからみ合いだけが存在する世界です。マッハが「要素」と呼んでいるものがどんなものを説明するには少し苦勞します。「感覚」と言うところやわかりやすいかもしれないし、マッハ自身もそのような言い換えをしないでもないのですが、正確に言うとき、「要素」は「感覚」とは異なります。マッハによれば、私たちが「感覚」と呼ぶものは、「要素」が感覚という（いわば）主観的なものと、感覚ならざる（いわば）客観的なものとに分けられることによってなりたつものなのです。つまり「要素」とは、そうした（感覚と感覚ならざるものとへの）区分がなされる前の、ナマの、むき出しの体験のようなものと言っているものなのです。

ここでは、そうした（感覚と感覚ならざるものとへの）区分がどのようにしてなされるとマッハが考えたかに立ち入ることはできませんが、ナマの、むき出しの体験とも言ふべき「要素」は、基本的に流動的なものとしてあります。もちろん、流動の具合は均一ではなく、そのなかには比較的恒常的な部分も存在します。そしてその比較的恒常的な部分を核としながら、それを中心に流動的なものが束ねられるというようにして、私たちがふだん「もの」と呼んでいるものづくりだされることとなります。マッハによれば、私たちが「もの」と呼んでいるものはどれもこれも、そのようにして構成された要素複合体にはかならないこととなります。したがってマッハは原子の存在を認めませんでした（マッハによれば原子なるものもまた、構成された要素複合体にはかならないこととなります）。が、それだけではありません。マッハによれば、私たちが自我と呼んでいるものもやはり、そのような、構成された要素複合体そのものでしかないこととなります。マッハ哲学のそうした立場が、東洋世界における反実体主義というが無実主義と深く重なるものであるということは、実は簡単に見てとることができることです。生前のマッハにたいしてそのことを指摘するものもいたようです。

が、マッハ哲学のそうした東洋的な性格は、東洋思想に多少なりとも関心のあるものがマッハの著作を読むならば誰もが簡単に気がつくことであり、たまたまそのことに気がついたというだけのことであれば、私もあえてそれをネタに学会の発表を試みるということはしなかったと思います。私が日本の発表においてお話ししたいと思うのは、たんにマッハ哲学にそうした東洋的なところがあるというだけではなくて、マッハ哲学におけるそうしたところがマッハ本人に東洋的な体験をももたらしていたのではないか、ということを考えるに至ったからです。

マッハ哲学が東洋的な性格をもつということだけならいざしらず、そのマッハ

哲学がマッハ本人に東洋的な体験をももたらしていた、ということについては、奇異に感じられる方がさらに多くいらつしやるかもしれません。私がそう考えるきっかけになったテキストをさっそく紹介してゆきたいと思えます。ここで紹介したいテキストはふたつあります。

エルンスト・マッハの名著と言え、誰もが、一八八五年に出版された『感覚の分析』をあげるはずですが、まず紹介させていただきたいのは、そのなかの有名な箇所です。「反形而上学的序説」というタイトルをもつ第一章の中ほどのところなのですが、マッハは、自我なるものは根源的なものではなく、根源的なものとしてある要素から構成されたものにほかならないということ述べたあと、こう言っています。つまり、私たちが自我なるものをそのようなものとみなすこと、そしてそれによって自我なるものがその高い価値を失うことが、私たちに「自由で輝かしい人生観」をもたしてくるはずだ、と。「自由で輝かしい人生観」というのは、マッハ本人のことばそのままです。

すでにお話したように、この箇所はかなり有名です。なぜ有名なのかといえば、目立つからです。なぜ目立つかという点、自然科学基礎論的な話から完全にはみだしているからであり、さらに、人生観としてもかなり突出していて、しかもそうした突出した人生観がいきなり語られているからです。

念のために申しておけば、マッハがここで語っているのはエゴイズムにたいする批判という、いささかありふれたことではありません。エゴなるものそのものが虚構のほかならないと言っているのです。もともと存在しないものだとおっしゃっているのです。そしてエゴを虚構と見なし、エゴにその価値を失わせることが「自由で輝かしい人生観」をもたらすと言っているのです。マッハが生きているのが、人間のエゴに高い価値を認めてきた西洋社会であることを考えると、マッハのこの発言はかなり異様でさえあると言えます。

ともかくマッハにとつて、自我が虚構であるということは、ひとつの理論的な帰結というだけではなくて、自由や輝かしさをともないながら体験されることとしてあったということは確かです。私が考えたいと思つたのは、マッハにそのような体験をもたらししたのは何だったのか、ということであるわけですが、そこへと考えをすすめる前におきたいテキストがもうひとつあります。

それは、マッハが一八八二年におこなった「科学探求の経済的性格」なる講演のおしまいの部分です（邦訳では「科学の基本的性格」というタイトルで『認識の分析』に収められています）。「科学探求の経済的性格」というタイトルからもわかるように、この講演は、いわゆる「思惟経済の原則」に関する講演であるわ

けなのですが、マツハはこの講演に実に印象的な終わり方をさせています。つまり、未来の科学においては、人間と世界との隔てがなくなるだけでなく、人間がすべての生あるもの、さらには無生物にたいしても温かい気持ちで接するようになるだろう、という予感を述べながら、中国の列子からの引用で全体を締めくくっているのです。

引用されているのは列子の天瑞第一の四のなかの一節です。列子が衛の国への旅の途中で食事をしたとき、道端にころがる鬮體を見て、ヨモギの茎を一本抜き取ってその鬮體を指さしながら、弟子にこう言います。「このものと私だけが知っている。我々は生きているのでも死んでいないということだ」。

マツハは講演をこの「このものと私だけが知っている。我々は生きているのでも死んでいない」ということを「というフレーズの（ドイツ語訳からの）引用で終えているのです。」

すでにお話したように、マツハ的な世界とは、流動する多元的な要素のからみ合いだけが存在する世界です。確かにそこにおいては、人間と世界との隔ても、生あるものと無生物の隔ても存在しません。どちらも流動する要素のからみ合いでしかないからです。そして、生あるものと無生物の隔てがなくなるとすれば、生と死の区別もなくなり、生なるもの、死なるものも存在しなくなり、存在するものはどれも、生きていても死んでいてもいないことになる、というのは、単純な論理的帰結であることになりました。

しかし、マツハがここで語っているのは、そうした論理的な推論を超えた、ひとつの境地の予感とも言えるべきものです。つまり、どちらも流動する要素のからみ合いでしかないから、そこには区別はないのだ、というような論理的な帰結として考えられるだけではなくて、自分という生けるものと、自分の前に存在する死せるものとの隔てがなくなることが実感され体感されるような境地の予感です。列子のように生と死の隔てのなさを感じることができる境地の予感です。そうした予感があったからこそ、そしてその予感を語るために、マツハは列子からの引用をおこなったと考えるほかありません。とすると、何がマツハをそうした境地への予感へとみちびいていったのでしょうか。それがこの発表において私が考えてみたいと思つたことでした。

私が考えたことは、実は単純です。すでに繰り返しお話ししたように、マツハ的な世界とは、さまざまな多元的な要素のからみ合いだけが存在する世界であるわけですが、マツハはそうした世界を、実際に体験しようとしたのだと思います。

そうした世界を実際に体験することができていたから、そうした世界について語ることもできたのだ、とも言えますが、ともかく、マツハは、そうした世界を実際に体験しようとしたのです。

そしてそのために、ひたすら感覚的な世界へ沈潜するということをおこなつたのだと思います。もちろん、すでにお話ししたように、マツハにとって感覚は根源的なものではありません。感覚は、根源的なものとしてある要素が、感覚と感覚ならざるものと分離されることよって、感覚なるものとなるのです。したがって、マツハが試みたはずの感覚的な世界への沈潜とは、そうした感覚以前のものへと向かつて感覚の世界の奥底へと沈潜するということであつたと思われまふ。たんに感覚的に体験されたものを感覚的に体験されたものとして確認するというのではなくて、感覚されたものさらに奥底にあるものへと向かつて、そしてそこに至るために、感覚の世界にひたすら沈潜するということをおこなつたのだと思われまふ。

たとえば、『感覚の分析』の第一章の中ごろですが、やはり有名な挿絵があります。安楽椅子に足をのぼした姿勢でよこたわり、右目をつぶつたときに左目に写る光景を描いた絵です。あたかも、左目の眼球の位置にカメラがおかれていて、そのカメラでとられた広角の写真のような図になっています。一番向こうには部屋の奥があり、その手前に、安楽椅子のうえにのびた足があり、一番手前には、鼻の左側や、裏から見られたまぶたの下端があります。図にされるとかなり特殊な印象を受けてしまうのですが、そうした光景は、実は、私たちの目にふだん写っているはずのものであるのです。しかし私たちはそうした光景をふだん見ていません。鼻やまぶたのある光景を見ていません。私たちがふだん目に見ている光景には鼻もまぶたもありません。が、そうであるのは、マツハによれば、私たちが見ているのが、すでに、構成された世界だからなのです。私たちがふだん見ているのが、体験されたままのナマの世界ではなくて、構成された世界であるからなのです。

つまり、マツハがおこなおうとしたのは、そうした構成された世界を見ることをやめて、構成ということがなされる前のナマの世界を見ることでした。そしてマツハがそのためにおこなつたのは、そうした、構成ということがなされる前のナマの世界をめざして、感覚の世界に沈潜するということであつたのです。

そしてマツハは、実際に、要素のからみ合いだけが存在する世界をそれなりに実際に体験したのです。そして、私とか世界といったものが、あるいは、生命をもつものとか、もたないものといったものが、たんなる構成物としてしか感じら

れなくなるような体験をしたのです。そしてその体験はマッハにとつて、自由で輝かしいものだったのです。マッハが列子からの引用をおこなったのも、その体験の自由さ、輝かしさを語るためだったのです。

感覚的な世界への沈潜という、たったそれだけのことが、そのような深い体験をもたらすということについて、疑問をおもちの方もいらっしゃるかと思いますが、東洋的な瞑想に多少なりともなじまれたことのある方であれば、感覚へと沈潜するということが、瞑想の基本的なテクニクであるということは簡単に了解していただけるはずですが。

たとえば、東洋的な瞑想のもつとも古典的なスタイルとも言うべきインドのヨーガの場合であれば、おだやかな呼吸にともなう身体的な感覚に沈潜するということが基本的なテクニクとしてあります。ヨーガにおける瞑想は、呼吸にともなう身体的な感覚を深く感じ、その感じに浸るところからはじめられます。

あるいは私たちにより身近なものとしてある座禅も、ヨーガとほぼ同じテクニクを用います。ヨーガの場合は、呼吸にともなう身体的な感覚への沈潜は目をつぶったままでおこないますが、座禅では、ふつう目を半分ほどつぶった状態でそれをおこないます。半分つぶった目で何をするのかと言えば、たとえば目の前の床の一点をみつめるということをおこなうのです。つまり視覚的な感覚への沈潜です。

あるいは中国の気功の場合であれば、からだの穏やかな動きがひきおこす動きの感覚を深く感じ、それに浸ることが基本的なテクニクとなります。

東洋における瞑想では、そうした、感覚に沈潜するというテクニクをもちいながら、私たちのふだんの暮らしをおおっている分け隔てがなくなる世界の体験へと向かいます。瞑想はそのためのものなのです。そしてそこでは、そうした、分け隔てがない世界こそがほんとうの世界であると見なされ、分け隔ては、私たちの迷いやこだわりがつくりだしたマボロシであると見なされることとなります。つまり、私がお話したいのは、マッハはマッハ的な世界の探求において、意図することがなかったとはいえ、まぎれもなく東洋的な瞑想をおこなうことになっていたのであり、そしてそれによって東洋的な体験をしていたということであり、そしてマッハがマッハ的な世界について語るさいに、中国の列子からの引用をおこなったことは、まったく正しいことだった、ということなのです。

確かに、マッハのそうした東洋体験はひじょうにささやかなものだったと思います。あるいは、東洋体験というよりは、そうした体験の予感のようなものだった、と言ったほうがよいのかもしれない。そうした体験を時間をかけて深めようとしたという形跡もありません。

私はまた、マッハ的な世界は東洋的な世界そのものなのだ、と言うつもりもありません。マッハが探求したのは、マッハが要素と呼ぶものからなる世界がどのようなありさまのものであるか、というよりも、その要素から、私たちが世界と呼んでいるものがどのようにして構成されるか、ということでした。マッハのおもな関心は、その、構成されたものに向けられています。

確かにマッハによれば、私たちが世界と呼んでいるものは、構成されたものとしてあります。構成されたものは構成されたものでしかありません。しかしそのことを理由に、マッハは、私たちが世界と呼んでいるものがマボロシであるとか、私たちの迷いやこだわりがそうしたマボロシを出現させているのだ、といったことを語るわけではありません。構成されたものとしてある世界は、私たちが生きなければならぬもの、私たちが生きるほかないものとしてあるのです。マッハはそうした世界を、あるいはそうした世界を生きていることを基本的に拒んではいません。自我がその価値を失い、生けるものと死せるものとの隔てがなくなる自由で輝かしい世界を望んでいたとしても、です。

けれども、たとえそうであるとしても、マッハにおける意図せざる東洋体験がひじょうに貴重なものであることに変わりはありません。それはたんに、瞑想というものがなかなか位置づきにくい西洋世界において、そうした体験をするものが少ない、しかも、自然科学という、東洋的な世界からかけはなれた世界においてはなおさら少ない、ということからだけではありません。マッハの東洋体験は、東洋世界と西洋世界という、今日なお交わることのあまりないふたつの世界をむすぶ貴重な接点となることができるものなのではないかと私は思うからです。マッハの東洋体験が意図せざるものであっただけに、なおさらそれは貴重な接点点なのではないかと私は思うのです。

時間がもうそれほどないので、結論だけを述べさせていただくことにします。マッハの東洋体験は、西洋世界にとつては、東洋的な瞑想を西洋世界のなかに位置づけるひとつのきっかけとなることができるものなのではないかと私は思います。こう言ってよければ、マッハ的な世界にとつて東洋的な瞑想とは、世界の根源的なあり方に近づくための方法であることとなります。

あるいはまたマッハの東洋体験は、東洋世界にとつては、東洋的な瞑想がもつ価値を西洋近代科学のことはで語るためのひとつのきっかけになることができます。

ものなのではないかと私は思うのです。こう言ってよければ、マツハにとって、東洋的な瞑想において体験される世界とは、そこから自然科学的な世界が構成されてくるような根源的な世界そのものであるのです。

私の発表は以上です。

.....

発表のあとの質疑応答の要旨(原崎のメモにもとづく)

加藤尚武先生 根拠がない話だ。マツハの著作は自然科学のことばかりだ。そのマツハが東洋的な体験をしていたとは考えられない。また、マツハが要素と呼んでは、やはり感覚的なものではないか？ 要素は感覚的なものではないと言いつつ切れない。

原崎 マツハの著作が自然科学の話ばかりであるだけに、報告で指摘したような発言の異質さがきわだつ。そうした異質な発言の背景を考えようとした。また、マツハも要素は感覚的なものではないとは言っていない。ただ、マツハも指摘するように、ふつう私たちは「ここに青いバンドの時計がある」とは言うけれども、「私は青い色を感覚している」とはめつたに言わない。そういうことを私たちが口にするのは、しかるべき視覚的な体験をへることによつてだ、とマツハは言っている。私もそう思う。

伊藤春樹氏(東北学院大学)やはり根拠がない。例の「挿絵」も、あまりに不自然な眺めだ。瞑想をしていると、ほんとに世界がこんな見え方をしてくるのか？ 原崎 瞑想において体験されることはさまざまだが、感覚的な世界の拡張は瞑想のさいにふつうに体験される。

氣多雅子氏(京都大学・司会)東洋的な瞑想を感覚的なものへの沈潜とだけ言うことはできないのではないか？

原崎 瞑想のためのテクニックとして感覚的なものへの沈潜がある。感覚的なものへの沈潜することがそのまま瞑想そのものだというのではない。

